



紫金山古墳出土 仿製三角縁唐草文帯三神二獣鏡について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重信, あゆみ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00016786

紫金山古墳出土

仿製三角縁唐草文帯三神二獸鏡について

重 信 あゆみ

はじめに

1. 紫金山古墳の概要
2. 紫金山古墳出土の鏡の役割
3. 三角縁唐草文帯三神二獸鏡

おわりに

はじめに

紫金山古墳は、4世紀前半の前方後円墳であり、鏡をはじめとして多くの遺物が発見されている。それらは、当時の対外交渉を考える上で、重要なものである。その中でも鏡は12面発見されており、それらの図像や配置、出土状況を考察することにより、当時の日本での鏡の役割を知る糸口となりえよう。

とくに、仿製三角縁唐草文帯三神二獸鏡(図1)には、漢鏡には描かれることがない二体の神像が描かれている。三角縁神獸鏡は、中国鏡の模倣度が強いものの一つである。



図1 紫金山古墳
仿製三角縁唐草文帯三神二獸鏡

また、「古墳時代の仿製鏡の特徴は単に中国鏡を模倣するだけにとどまらず、早い段階からさまざまな改変の手を加えた¹⁾」との指摘もある。紫金山古墳からは1面の三角縁神獸鏡と9面の仿製三角縁神獸鏡が出土している。それらの関係については、「紫金山古墳出土の仿製三角縁神獸鏡は古い型式だけで構成されている。ただ細かい点から言

1 京都大学文学部考古学研究室『紫金山古墳と石山古墳』、京都大学文学部博物館、1993年、14頁。

えば、違いはある。獣文帯三神三獸鏡はおそらく三角縁神獸鏡を直接模倣した段階に近い古い特徴を示しているが、他の獣文帯三神三獸鏡はすでに表現に簡略化が認められる。さらに鳥文帯三神三獸鏡や唐草文帯三神三獸鏡は、唐草文帯三神二獸鏡に表現された神像と、獣文帯三神三獸鏡の配列が複合した段階のものである²』と述べる。図2の三角縁神獸鏡は小林行雄が舶載鏡と分類しており、仿製三角縁神獸鏡はこのような舶載鏡に倣って製作されている。しかし、その中でも図像は改変されてきた。

本稿ではとくに、図1の仿製三角縁唐草文帯三神二獸鏡に注目した。四肢のない二体は、管見の限りは漢鏡の中では見当たらない図像である。三角縁神獸鏡は日本で発見され、また、図1の仿製三角縁唐草文帯三神二獸鏡に関しては、泉屋博古館に収蔵されているものや岡山の鶴山丸山古墳より発見されているものが同范関係にある。同范鏡と鏡の分配については小林行雄が指摘している。三角縁神獸鏡は、工人群により製作され、その図像も改変を加えられている。図1の仿製三角縁唐草文帯三神二獸鏡はおそらくは、二神二獸鏡の図像や画像鏡の図像を受け継いだものであろう。二神二獸鏡や画像鏡には西王母や東王父が描かれる。つまり、図1の仿製三角縁唐草文帯三神二獸鏡の四肢のない神像は新たに工人群によってくわえられたものであろう。それは、湖南省出土の帛画や四川省の画像石墓の世界観が影響しているのかもしれない。

1. 紫金山古墳の概要

紫金山古墳は、大阪府茨木市室山1丁目に所在する4前半の前方後円墳である。「茨木市（旧三島郡豊川村）宿久庄の大阪府警察病院茨木分院の構内にあり、洪積丘陵の末端を利用して作られた前方後円墳で、全長100メートル、後円部76メートル、前方部幅40メートルあり、円筒埴輪及び葺石を備えている。後円部の墳頂に、病院の上下水道水源池を作ったことから、竪穴式石室が発見されるにいたったのである³』とある。また、紫金山古墳の存在は戦時中に公に知られるようになった。

後円部に竪穴式石室があり、12面の鏡と、玉石飾類、貝輪、短甲刀剣、農工具、銅器、紡錘車と豊富な副葬品が出土した。築造時期は4世紀ごろと推定されている。また、紫金山古墳が位置する茨木市域には古墳時代の前期、中期、後期を通じて古墳が築かれて

2 同上、112頁。

3 『大阪府立近つ飛鳥博物館図録29 大阪府の主要古墳 紫金山古墳』、大阪府近つ博物館、2003年、2頁。

いる⁴。前期古墳としては紫金山古墳や將軍塚古墳、中期古墳には太田茶臼山古墳⁵、後期古墳では南塚古墳や海北塚古墳などの各時期を代表する古墳が存在する。そして、内部構造は堅穴式石槨と呼ばれる埋葬施設であった。堅穴式石槨は、遺体及び棺の密封を目的としているとされる。

『新修 茨木市史』には、「古墳時代前期前半段階の茨木市域の諸集団は、弁天山古墳群を造営した奈佐原の勢力とも連携しつつ、王権中枢や遠隔地との密接な関係を築いていったものと推察される⁶」と、紫金山古墳が築造される直前の様子が述べられている。さらに、紫金山古墳が造られた4世紀中葉の情勢の変化については、つぎのように述べる。

三世紀後半から四世紀初頭の淀川流域では、三島の弁天山古墳群、乙訓の向日丘陵古墳群、北河内では森古墳群を築いた集団が優勢を誇った……。しかし、四世紀中葉にはそれまで目立った首長墓が存在しなかった地域にも大型の前方後円墳が築かれるようになり、情勢に変化が生じてくる⁷。

また、紫金山古墳の被葬者については、現在のところ不明である。しかし、紫金山古墳より朝鮮半島製とみられる又鋏や有肩鉄斧が出土していることや、筒形銅器と呼ばれる儀礼用の青銅器が朝鮮半島南部の金官加耶の地域で多数出土していることから、朝鮮半島南部の地域と密接な関係を有していた可能性がある⁸。

このように、紫金山古墳の副葬品は、朝鮮半島南部とのつながりを示している。さらに、三角縁神獸鏡の出土は、当時の政治権力の中核との関わりを示唆している。

つぎに、副葬品である鏡について述べ、その配置の状況より古墳における鏡の役割について考察していく。

4 現在の考古学では、この前方後円墳の築かれた時代を前・中・後の三期に区分しており、おおむね前期が3世紀中葉から4世紀中葉、中期が4世紀後葉から5世紀中葉、後期が5世紀後葉から6世紀代にあたる。(茨木市史編さん委員会『新修 茨木市史』第1巻、茨木市、2012年、350頁。

5 太田茶臼山古墳は現在、宮内庁が管理し、継体天皇陵とされている。しかし、『新修 茨木市史』によると、「この古墳(太田茶臼山古墳)からは宮内庁の調査によって円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか、家形埴輪、甲冑形埴輪、馬形埴輪、水鳥形埴輪などが出土しており、それらの年代観から五世紀前半ないし中頃に位置付けられるようになった。このことから、継体天皇の没年(五二七年または五三一年)に合わず、真の継体陵はやや東にある今城塚古墳であるとみなされるようになってきた」(381頁)と継体陵が今城塚古墳であると示している。

6 『新修 茨木市史』、356頁。

7 同上、357頁。

8 同上、369～370頁、筆者要約。

2. 紫金山古墳出土の鏡の役割

紫金山古墳の竪穴式石槨においては、棺床内から1面、石槨北小口から6面、南小口から5面、計12面の青銅鏡が出土した。それらの鏡には、漢鏡・三角縁神獸鏡⁹・仿製鏡である勾玉文帯神獸鏡の3種類に分けることができる。以下でそれぞれの出土状況を見ていく。

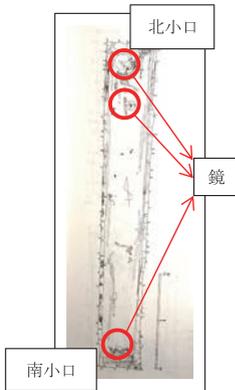


図2 竪穴式石槨図面



図3 方格規矩四神鏡

①方格規矩四神鏡 (図3) (径：23.8cm 重量：1011.3g)

「棺内の被葬者の上半身近くと推定される位置に鏡背面を上に向けて置かれていた¹⁰」と、被葬者と鏡の位置について推定している。この鏡が被葬者の上半身の近くにおかれたと推定される根拠については、「石槨平面形において北小口幅のほうが南小口幅よりも広いこと、ほとんどの刀剣の切先が南に向けられていることから、頭位は北方向であったと推定される¹¹」と、石槨の形と刀剣の切先の方向より述べられている。また、被葬者の頭位方向については、都出比呂志が『竪穴式石室の地域性の研究』の中で、頭位方向の地域性について詳しく述べている。紫金山古墳が位置する畿内においては、北方向が優位であるとのことで、紫金山古墳の被葬者もまたその慣例にもれることなく北方向にむけられていたと考えられる。

9 出土した三角縁神獸鏡が仿製鏡であるか否かについては、考察は改めて検討することとし、本稿では京都大学大学院文学研究科考古学研究室『紫金山古墳の研究 墳丘・副葬品の調査』(2007年)の表10(125頁)に従って取り扱うこととする。

10 京都大学大学院文学研究科考古学研究室『紫金山古墳の研究 墳丘・副葬品の調査』、2007年、126頁。

11 同上、118頁。

また、同じ上半身側から玉類が出土している。この玉類に関しては、小林行雄は、首飾りであったとし¹²、また、阪口英毅は、腕飾りや耳飾りなどの左右で対をなす飾りであった可能性を示唆している¹³。いずれにしても、玉類は被葬者が装着していたと考えられる。玉は、中国では、邪を避けるために身に付けられ、前漢時代の金縷玉衣で覆われた被葬者が発見されている。紫金山古墳の副葬品である玉類もまた同様のものとして被葬者に着けられたと思われる。被葬者近くに配置された方格規矩四神鏡のみが漢鏡であった。

②三角縁神獸鏡・勾玉文帯神獸鏡

出土した12面のうち10面が三角縁神獸鏡であった。これらは、石槨北小口より5面、石槨南小口より5面が発見されている。また、勾玉文帯神獸鏡が1面出土している。以下に、三角縁神獸鏡、勾玉文帯神獸鏡の配置を整理しておく。

配置	三角縁神獸鏡	文様内容	
石槨北小口	鳥文帯三神三獸鏡 (図4)	神像(三体):鎮座し、冠のようなものを被る。 目を見開いたような表現 獸像:口を大きく開き、ギザギザの歯を見せる。 目を大きく見開く	鏡面を内に向けた状態で出土
	唐草文帯三神二獸鏡 (図5)	神像:二体は怒り肩の東王公風、一体はなで肩 獸像:口や目を大きく開く	
	獸文帯三神三獸鏡 (図6)	神像:なで肩の表現 獸像:二体は左向き、一体は右向き	
	獸文帯三神三獸鏡 (図7)	神像:座像 獸像:頭を縦位置に向け、瞳を点で表し、口を大きく開く。脚を大きく前後に踏み出した姿勢に表現する。	鏡面を内に向けた状態で出土
	獸文帯三神三獸鏡 (図8)	神像:上記の図6と同様。 獸像:頭部は横位に向ける。開口し、歯列が見える。歯列は上下二重に表わすものと上列のものがある。下あごは二重表現。	
	勾玉文帯神獸鏡 (図9)	神像:「勝」を付けた西王母、両側には、手足のはっきりしない小さな神像が表現される。対峙して、端坐する神像が描かれる。その両側にも上記と同様の神像が表わされている。 獸像:首の長い獸像(四体)、	鏡面を内に向けた状態で出土

12 小林行雄・近藤義郎「古墳の変遷」、『世界考古学体系』第3巻、日本Ⅲ、古墳時代、平本社、1959年、25頁。

13 註11参照。

配置	三角縁神獸鏡	文様内容	
石槲南小口	獸文帯三神三獸鏡 (図 10)	神像 (三体) : 襟脇にひだ表現、冠 獸像 (三体) : 右向き、口に巨・素環頭大刀を 銜える、開口	鏡面を内にむ けた状態で出 土
	唐草文帯三神二獸 鏡 (図 11)	神像 : 東王公 (怒り肩・袖を巻き上げる) 四肢のない向かい合わせの二体の神像 獸像 : 巨の端、斧を口に銜える	
	唐草文帯三神二獸 鏡 (図 12)	神像 : 二体は怒り肩の東王公風、一体はなで 肩 獸像 : 口や目を大きく開く	
	獸文帯三神三獸鏡 (図 13)	神像 : 上記の図 11 と同様。 獸像 : 頭部は横位に向ける。開口し、歯列が 見える。歯列は上下二重に表わすものと上列 のものがある。下あごは二重表現。	
	獸文帯三神三獸鏡 (図 14)	神像 : 上記の図 11 と同様。 獸像 : 頭部を横位に置く。省略化されている。	鏡面を内にむ けた状態で出 土



図 4 鳥文帯三神三獸鏡



図 5 唐草文帯三神二獸鏡

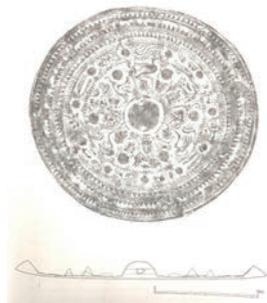


図 6 獸文帯三神三獸鏡

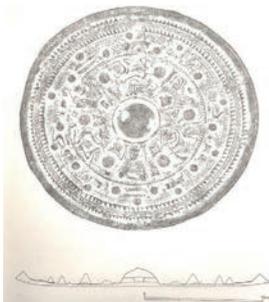


図 7 獸文帯三神三獸鏡



図 8 獸文帯三神三獸鏡



図 9 勾玉文帯神獸鏡



図10 勾玉文帯神獸鏡



図11 唐草文帯三神二獸鏡



図12 唐草文帯三神二獸鏡

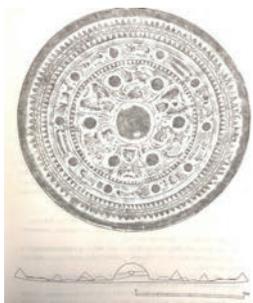


図13 獸文帯三神三獸鏡

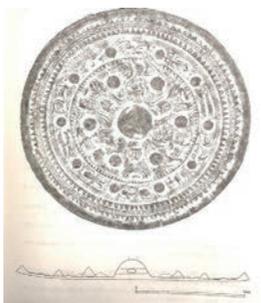


図14 獸文帯三神三獸鏡

上記にまとめた鏡は石槨南北小口に配置されている。被葬者の頭位が北向きであったとすると、11面の鏡は被葬者の頭と足元に置かれていたことになる。また、それらの鏡は、鏡面を内、つまり、石槨の内側に向けて配置されていたことがわかる。鏡の役割に関しては、辻田淳一郎が『鏡の古代史』のなかで「いわゆる「辟邪」や「遺体保護」といった意味と役割であり、倭製鏡に描かれた文様からは、中国鏡思想・神話世界を換骨奪胎しながら改変し、独自の文様世界として描き出すあり方であった¹⁴⁾と述べている。また、大形徹は「古代日本の祭祀」のなかで「被葬者（の魂）は鏡を通して、死者（鬼）の世界に入り込めると考えられたのではないのでしょうか¹⁵⁾」と述べている。

また、折口信夫が「元来、日本の古い信仰では、生と死との区別は、不明瞭なものであつた。人が死んでも、魂をよび戻せば生きかへる、と申うてゐた¹⁶⁾」と述べるように、

14 辻田淳一郎『鏡の古代史』、角川選書、2019年、Kindleの位置No.2884-2886

15 大形徹「古代日本の祭祀」、古代史シンポジウム「発見・検証 日本の古代」編集委員会『発見・検証 日本の古代III 前方後円墳の出現と日本国家の起源』、KADOKAWA、2016年、308頁。

16 折口信夫『古代研究』、「大嘗祭の本義」、大岡山書店、1930年、893頁。

被葬者は死者の世界と現世とを行き来することができると考えられていたのではないだろうか。つまり、墓における鏡は、繋がりのある死者の世界と現世を悪霊から守るという辟邪の役割をするとともに、被葬者の魂が行き来するための装置の役割をも果たしていたと考えられる。

さらに、大形は「後の時代の三角縁神獣鏡も分厚く、透光鏡であったようです。2014年には京都国立博物館が3Dプリンターで作った三角縁神獣鏡で、背面の神獣の模様を壁面に映す実験をしていました。鏡の中には神仙（鬼神の世界）があり、それを幻灯・スライド・映画のように出現させたのでしょう¹⁷」と指摘する。つまり、三角縁神獣鏡に描かれる文様の世界は、当時の為政者の死者の世界を人びとに視覚的に示したものであったといえるのではないか。

鏡には神仙の世界が描かれている。上記にもあるように、鏡の文様は改変されていた。その一つとして、図11があげられるであろう。

3. 仿製三角縁唐草文帯三神二獣鏡（図1）

石槨南北小口からは三角縁神獣鏡が10面発見されている。それらには、神像や口を大きく開けた獣神が描かれている。とくに、図1の仿製三角縁唐草文帯三神二獣鏡には漢鏡には描かれていない二体の神像が描かれている（図15）。本稿では、仿製三角縁唐草文帯三神二獣鏡の図像に注目して述べていく。



図15 仿製三角縁唐草文帯三神二獣鏡 四肢のない神像

仿製三角縁唐草文帯三神二獣鏡の内区は花文と振文座をもつ4個の乳で区分し、神像と獣像とを対置させている（図16）。素円鈕、四か所に乳、その間に神像、二体の獣と交互において、四方に対列する構成の鏡は、中国の後漢の鏡と同じである（図17）。その中の神像は、唐草文帯三神二獣鏡に描かれた東王父と山型の冠を被っている点、肩から翅のようなものが表現されている点でよく似ている（図18）。唐草文帯三神二獣鏡の

17 大形、310頁。

構成は図17を参考にした可能性はないだろうか。ただ、四肢のない神像は新たに追加されている。



図16 紫金山古墳
仿製三角縁唐草文帯三神二獸鏡

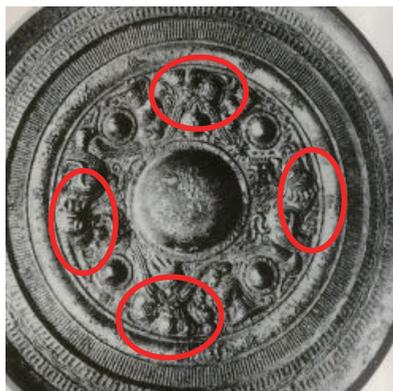


図17 後漢、河南洛陽出土
五神二獸四方対列式明鏡



図18
左：紫金山古墳仿製三角縁
唐草文帯三神二獸鏡
右：後漢、河南洛陽出土
五神二獸四方対列式明鏡

まず、図16の神像は、肩よりとげのようなものが出ている。また、肩は怒り肩である。袖から紐のようなものが出ており、紐の先はカールしている。重ねられた襟の両側には、丸い珠のようなものが3つずつ縦に並んでいる。足は胡坐を組んでいるように見える。山型のような冠を被り、顔の表情は乏しい。身体と顔は正面を向いている。この図像に関して、『紫金山古墳の研究 墳丘・副葬品の調査』では、東王父ではないかと推測している¹⁸。確かに、中国、山東省臨沂市白荘出土の東王父とされる図像も同様の山型の冠を被り、肩から翅のようなものが出ている。顔の表情が不明である。また、端坐している（図19）。このような特徴は、図18の神像と重なる。樋口隆康が『古鏡』の中で後漢式鏡に分類している図20の鏡には「東王父」と銘記された神像がある。身体と顔

は斜めを向き、山型の冠を被っている。山型の冠を被るという点では、紫金山古墳より出土した唐草文帯三神二獣鏡の神像は東王父の可能性がある。

また、ともに描かれる獣像は、眼を大きく開き、ギザギザの歯列が見えるように描かれる。そして、口には斧や鉞、大刀を銜えている。このように大きな口を開け、棒のようなものを銜える図像が中国の墓の門のところに描かれること

がある（図21）。門に描かれることから辟邪と考えられることができる。鏡は辟邪の役割を担っていたことから、図22のような辟邪の獣像が描かれたのかもしれない。

つぎに、東王父とされる神像と鈕を挟んで反対側に描かれる二体の神像（図23）について検討していく。この四肢のない神像に関しては「奇妙な表現」と記すのみで、何を表わしているのかは示していない¹⁹。また、現段階では、中国で発見されている画像鏡や神獣

鏡にこのような神像が描かれているものは見当たらない。しかし、兵庫県へボソ塚古墳（前期）出土の三角縁三神二獣鏡（図24）、愛知県東之宮古墳（3世紀末～4世紀初）出土の三角縁唐草文帯三神二獣鏡（図25）、鶴山丸山古墳（4～5世紀）出土の鏡、兵庫



図19 後漢 東王父



図20 後漢式鏡 神人歌舞画像鏡



図21 南北朝期 勝を銜える怪神



図22 紫金山古墳 斧を銜える獣像

19 『紫金山古墳の研究 墳丘・副葬品の調査』、130頁。

県東車塚古墳（5世紀）出土の三角縁唐草文帯三神二獸鏡（図26）、泉屋博古館収蔵の三角縁三神二獸鏡（図27）に同様の四肢の無い神像が描かれていた。上記にあげた鏡はいずれも三角縁神獸鏡に分類される。これらの鏡の中で、泉屋博古館の鏡と鶴山丸山古墳出土の鏡、そして紫金山古墳出土の三角縁唐草文帯三神二獸鏡が同範関係として位置づけされている²⁰。



図23 仿製三角縁唐草文帯三神二獸鏡
四肢のない神像



図24 兵庫県へボソ塚古墳（前期）
出土の三角縁三神二獸鏡



図25 愛知県東之宮古墳（3世紀末～4世紀
初）出土の三角縁唐草文帯三神



図26 兵庫県東車塚古墳（5世紀）出土の
三角縁唐草文帯三神二獸鏡



図27 泉屋博古館収蔵の三角縁三神二獸鏡

20 同上、同頁。同範鏡分有関係については、小林行雄が『古鏡』（学生社、1965年）に関係図として表わしている。さらに、それを受けて森下章司が『紫金山古墳と石山古墳』の中で、新資料を追加して分有関係を新たに示している（119頁）。

上記に挙げた図24～図27に描かれた四肢のない神像をみていく。まず、図24の四肢のない神像は、二体とも顔は正面を向く。しかし、身体は、横向きのように見える。左側の神像の髪は短く束ねられているように見える。また、右側の神像の髪は束ねられ後ろへと流すように表現されている。それぞれ目は開き、口は左側の神像は閉じ、右側の神は開いている。二体の間には、小さな珠のようなものが描かれている。下肢は曲げて描かれ、その間には坏のついた台のようなものが描かれている。中国の画像石に描かれる芝草とよく似ている(図28)。



図28 前漢伏羲と女媧と芝草

つぎに図25をみていく。図25は、愛知県東之宮古墳(3世紀末～4世紀初)出土のものである。図25の二体の神像は顔は斜めを向いている。身体と顔の境目より翅のようなものが出ている。身体は、向かい合っている。下肢は曲げている。二体とも頭には冠のようなものをつけている。図24と同じように二体の間には珠のようなものが描かれ、斜線で囲われている。

兵庫県東車塚古墳(5世紀)出土の図26についてみていく。右側の神像は、顔が正面に向き、左側の神像は斜めを向いているように見える。また、髪は二体とも束ねて横に流れるように表現されている。身体を曲げる。二体の間には珠のようなものが描かれている。

泉屋博古館収蔵の三角縁三神二獸鏡に描かれている二体の神像は顔を寄せ合っているように見える。また、頭には冠のようなものを被っている。身体は曲げる。二体の間は、剥離しているため、何かが描かれていたかどうかについては不明である。

最後に、紫金山古墳出土の三角縁唐草文帯三神二獸鏡に描かれる四肢のない神像をみていく。二体の神像の顔は、斜めを向いて寄せ合っている。身体は、横向きである。二体の神の頭には冠のようなものが描かれ、束ねられた髪のようなものが垂れている。二体の神像の間には何も描かれていない(図1)。

上記のような神像は、三角縁神獸鏡にのみ表現されている。では、このような神像は中国の画像石墓で見られる。図29は、四川祥輝縣新勝郷竹瓦鋪出土の女媧と伏羲である。顔を寄せ合い、蛇身を絡ませている。紫金山古墳出土の四肢のない神像と図29は、顔を寄せ合っていること、四肢のない蛇身であることが共通している。さらに、大形が「鏡がこの世とあの世を結ぶ呪具であり、再生復活の象徴です」と指摘するように、鏡が再

生復活を象徴するならば、鏡の文様に再生を示す題材が描かれた可能性もあるであろう。古来より日本では蛇の脱皮を「生命を更新するめでたいもの²¹」ととらえていた。つまり、再生の象徴である。また、小島環禮が「三輪の山の神は、大地の主の蛇である²²」と述べるように、古墳時代の人にとって神であった。さらに、「その蛇を統御するのが大王の権威であった²³」と、当時の王朝と蛇との関係を示唆している。このように、古代の日本では蛇を神聖視していた。つまり、四肢のない神像は蛇と関係がある神像であったと思われる。



図29 後漢 伏羲と女媧

また、中国の湖南省長沙市で発見された馬王堆漢墓に副葬品として納められていた帛画にも上部中央に下半身が蛇で被髪的人物が描かれている。この像に対して曾布川寛は女媧ではないかと推測している²⁴。そして、曾布川は女媧の役割について天帝と解している。さらに、大野裕司は睡虎地秦簡『日書』の「女果」を「女媧」とし、「女子事」（妊娠、出産）を司る神としている²⁵。

また、この四肢のない神像が描かれた要因の一つとして、工人群の存在があるのではないか。岸本直文は「三角縁神獸鏡製作の工人群」のなかで、製作集団を四神四獸鏡群、陳氏作鏡群そして二神二獸鏡群の三派をあげている。また、岸本が「三派はそれぞれ特有の神獸像表現をもち、中国鏡の文様構成の中から新たな神獸像配置を次々に考案しながら、全体として共通の変化の方向をとり、最終的には三神三獸鏡へと推移していく²⁶」と述べるように、それぞれの工人が交流があり、新たな文様を創作していった。さらに、二神二獸鏡群は画像鏡であり、画像鏡が南方（長江流域）で発展を遂げたことは『図説 中国古代銅鏡史』の中で述べられている²⁷。南方には馬王堆帛画に描かれたような女媧を中心とした世界観が残されていた可能性がある。そして、工人群の交流の中で、伏羲や女媧の図像が三角縁神獸鏡に取り入れられた可能性はあるのではないか。

21 吉野裕子『蛇 日本の蛇信仰』、講談社、1999年、287頁。

22 小島環禮『蛇の宇宙誌』、東京美術、1991年、33頁。

23 同上、同頁。

24 曾布川寛『中国美術の図像と様式』図版編、中央公論美術出版、2006年、87頁。

25 大野裕司「睡虎地秦簡『日書』における神霊と時の禁忌」、『中国出土資料研究』第9号、2005年、50頁。

26 岸本直文「三角縁神獸鏡製作の工人群」、『史林』72、1989年、33頁。

27 孔祥星・劉一曼『図説 中国古代銅鏡史』、海鳥社、1991年、118頁。

おわりに

紫金山古墳には12面もの鏡が副葬品として納められていた。そして、その中には10面の三角縁神獸鏡が含まれていた。本稿では、とくに、三角縁唐草文帯三神二獸鏡の神像について考察をした。三角縁唐草文帯三神二獸鏡には、東王父と思われる神像と四肢のない神像、そして、二体の辟邪の役割をもつ獸像が描かれていた。四つの乳の間に神像と獸像が交互に描かれるという構図は、中国の四方対列式明鏡の流れをくむものであったのかもしれない。しかし、四肢のない神像に関しては、中国の鏡では管見の限り見当たらなかった。つまり、三角縁神獸鏡を製作した工人により新たに追加された図像であると思われる。四肢のない神像は、人頭蛇尾の姿であり、画像石に描かれる伏羲と女媧の顔を寄せ合う姿に類似している。伏羲と女媧は画像石墓では天帝の位置に配置されていたが、次第にその地位を降下させ、西王母の侍臣として描かれていくようになる。また、画像石に描かれている世界を図像として表わした画像鏡にも西王母と東王父を中心とした世界が描かれ、伏羲と女媧が描かれたものは現在のところ見当たらない。しかし、古墳より発見された三角縁神獸鏡に描かれた図像はおそらくは伏羲と女媧であろう。つまり、工人たちが受け継いできた馬王堆帛画に描かれた女媧を天帝とする世界観は、三角縁神獸鏡の中で再度表わされることとなり、それは、当時の工人たちの死後の世界を視覚化したものであったのではないか。

《図版目録》

- 図1 『大阪府立近つ飛鳥博物館図録29 大阪府の主要古墳 紫金山古墳』、大阪府近つ博物館、2003年、7頁
- 図2 京都大学大学院文学研究科考古学研究室『紫金山古墳の研究 墳丘・副葬品の調査』、2007年、119頁、第55図（左）
- 図3 同上、127頁、第60図
- 図4 同上、133頁、第63図
- 図5 同上、136頁、第64図
- 図6 同上、139頁、第66図
- 図7 同上、141頁、第67図
- 図8 同上、142頁、第68図
- 図9 同上、147頁、第71図
- 図10 同上、129頁、第61図

- 図11 同上、131頁、第62図
- 図12 同上、137頁、第65図
- 図13 同上、143頁、第69図
- 図14 同上、145頁、第70図
- 図15 『大阪府立近つ飛鳥博物館図録29 大阪府の主要古墳 紫金山古墳』、大阪府近つ博物館、2003年、7頁、一部
- 図16 図1と同様
- 図17 梁上椿著、田中琢・岡村秀典訳『巖窟藏鏡』、同朋舎出版、1989年、354
- 図18 左：『大阪府立近つ飛鳥博物館図録29 大阪府の主要古墳 紫金山古墳』、大阪府近つ博物館、2003年、7頁、一部
右：梁上椿著、田中琢・岡村秀典訳『巖窟藏鏡』、同朋舎出版、1989年、354、一部
- 図19 中国画像石全集編輯委員会・蔣英炬主編『中国画像石全集 山東漢画像石』3巻、山東美術出版社、2000年、図13
- 図20 樋口隆康『古鏡』、新潮社、1979年、図版58、114
- 図21 小南一郎『西王母と七夕伝承』、平凡社、1996年、119頁、図23
- 図22 『大阪府立近つ飛鳥博物館図録29 大阪府の主要古墳 紫金山古墳』、大阪府近つ博物館、2003年、7頁、一部
- 図23 図15と同様
- 図24 樋口隆康『古鏡』、新潮社、1979年、図版117、233
- 図25 『鏡の時代—銅鏡百枚—』、大阪府近つ飛鳥博物館、1995年、57頁、79
- 図26 『鏡の時代—銅鏡百枚—』、大阪府近つ飛鳥博物館、1995年、29頁、24
- 図27 樋口隆康『古鏡』、新潮社、1979年、図版117、234
- 図28 張新強・李陳広篇『南陽漢画早期拓片選集』、中州古籍出版社、1992年、85頁、図86
- 図29 中国画像石全集編輯委員会・蔣英炬主編『中国画像石全集 四川漢画像石』7巻、山東美術出版社、2000年、図127

《参考文献》

- ・小林行雄・近藤義郎「古墳の変遷」、『世界考古学体系』第3巻、日本Ⅲ、古墳時代、平本社、1959年
- ・小林行雄『古鏡』、学生社、1965年
- ・林巳奈夫「漢鏡の図柄二、三について」、『東方學報』44、1973年、1～65頁

- ・林巳奈夫「漢鏡の図柄二、三について（続）」、『東方學報』50、1978年、57～74頁
- ・樋口隆康『古鏡』、新潮社、1979年
- ・梁上椿著、田中琢・岡村秀典訳『巖窟藏鏡』、同朋舎出版、1989年
- ・岸本直文「三角縁神獸鏡製作の工人群」、『史林』72、1989年、643～685頁
- ・小島瓔禮『蛇の宇宙誌』、東京美術、1991年
- ・孔祥星・劉一曼著、高倉洋彰・田崎博之・渡辺芳郎訳『図説 中国古代銅鏡史』、中国書店、1991年
- ・京都大学文学部考古学研究室『紫金山古墳と石山古墳』、京都大学文学部博物館、1993年
- ・『鏡の時代—銅鏡百枚—』、大阪府近つ飛鳥博物館、1995年
- ・小南一郎『西王母と七夕伝承』、平凡社、1996年
- ・吉野裕子『蛇 日本の蛇信仰』、講談社、1999年
- ・中国画像石全集編輯委員会・蔣英炬主編『中国画像石全集 山東漢画像石』3巻、山東美術出版社、2000年
- ・中国画像石全集編輯委員会・蔣英炬主編『中国画像石全集 四川漢画像石』7巻、山東美術出版社、2000年
- ・『大阪府立近つ飛鳥博物館図録29 大阪府の主要古墳 紫金山古墳』、大阪府近つ博物館、2003年
- ・大野裕司「睡虎地秦簡『日書』における神靈と時の禁忌」、『中国出土資料研究』第9号、2005年
- ・曾布川寛『中国美術の図像と様式』図版編、中央公論美術出版、2006年
- ・京都大学大学院文学研究科考古学研究室『紫金山古墳の研究 墳丘・副葬品の調査』、2007年
- ・小林三郎『古墳時代倣製鏡の研究』、六一書房、2010年
- ・阪口英毅『前期古墳解明への道標 紫金山古墳』、新泉社、2011年
- ・茨木市史編さん委員会『新修 茨木市史』第1巻、茨木市、2012年
- ・川勝守『三角縁神獸鏡と東アジア世界』、汲古書院、2012年
- ・川勝守『三角縁神獸鏡と東アジア世界 続』、汲古書院、2015年
- ・古代史シンポジウム「発見・検証 日本の古代」編集委員会『発見・検証 日本の古代 III 前方後円墳の出現と日本国家の起源』、KADOKAWA、2016年
- ・岡村秀典『鏡が語る古代史』、岩波書店、2017年
- ・辻田淳一郎『鏡の古代史』、角川選書、2019年

- ・ 實盛良彦編『銅鏡から読み解く2～4世紀の東アジア 三角縁神獸鏡と関連鏡群の諸問題』、勉誠出版、2019年
- ・ 折口信夫『古代研究』第2巻、「大嘗祭の本義」、大岡山書店、1930年